HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 林芙美子『放浪記』の成立過程 : 改造社版から新潮社版まで |
| Author(s) | 姜, 銓鎬 |
| Citation | 研究論集, 13, 1(右)-15(右) |
| Issue Date | 2013-12-20 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/54080 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 021_KANG.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 林芙美子『放浪記』の成立過程

## ――改造社版から新潮社版まで――

姜　銓鎬

**要　旨**

林芙美子（一九〇三～一九五一）の『放浪記』は、一九三〇年に初版が発刊されて以来、一九三九年の改訂版を経て二〇一二年の復元版に至るまで、数多くの版本が存在する作品である。ところで、戦後の版本は、おおよそ改訂版を版本としており、最近発刊された版本の中では、初版を底本としているものが多い。つまり、数多くの『放浪記』の中で、この二種類の版本は一番重要な底本になっているのである。

改造社から出た『放浪記』は、整理されていない野性味を持つ作品として認識されている。一方、新潮社から出た『放浪記―決定版―』（改訂版）は、構成的な部分において、一層整理された形態になっている。こういう特徴は、それぞれの版本を比較することで確認することができる。

しかし、今までの『放浪記』研究は、作品の成立において出版社の変更ということを看過し、これについて論じる研究も登場していない。そこで本論では一九三〇年の改造社版『放浪記』及び一九三九年の新潮社版『放浪記―決定版―』を中心として、その成立過程をまとめながら、出版社の変更の原因と理由について考察しようとする。また、先行研究で改訂版を初版より低く評価する傾向に注目し、そのような批判意見について再考する。改訂版に対する批判意見として共通するのは、『放浪記』のステレオタイプ化した「ルンペン文学」というイメージを放棄していない点である。しかし、これこそ『放浪記』に対する批判を払拭しようとした芙美子の意思とは正反対の意見であり、改訂版の意義を完全に無視することになる。

## はじめに

本論は『放浪記』の成立過程に注目し、論じることを目的にする。そして、どのような経緯でそれぞれの『放浪記』が発刊されたのか、作品の中に書かれた「はしがき」・「あとがき」を通じて確認しようとする。

ただし、網羅的な『放浪記』の版ごとの異同を対象とするのは紙面の限度があるので、改造社と新潮社で発刊された著作に限って扱うことにする。この二社の版本に注目する理由は、『放浪記』という作品の評価において、改造社の初版と新潮社の改訂版が大きい影響を及ぼしている点にある(1)。

また、当時内務省による検閲をめぐる改訂版の問題点にも注目する。『放浪記』の成立過程について論じている先行研究では、初版と改訂版の間で窺われる文体の変化に焦点を合わせている。しかし、伏せ字から見られる、つまり、改訂版から見られる検閲の痕跡にはほとんど注目していない。そこで、本論では、初版と改訂版の中で、どういう言葉が伏せ字になったか、またどういう伏せ字が削除されたのかを確認してみる。

## 一　『放浪記』と『続放浪記』の発刊

『放浪記』は、芙美子が一九二三年から一九二六年まで書いた日記（後日、「歌日記」と名付けた）を基にする。彼女は、女学校を卒業した後、婚約者であった岡野軍一を追って上京するが、まもなく岡野から捨てられ、一人で東京に住むことになる。この時期の生活、経験、感想を書いたのが『放浪記』である。

この『放浪記』が世に広く知れ渡るのは、新人女性作家の発掘という目的で一九二八年七月に創刊された『女人芸術』に連載したときからである。ただし『女人芸術』の主宰者である長谷川時雨（一八七九～一九四一）の夫、三上於菟吉（一八九一～一九四四）の助力がなかったら、林芙美子のデビューはより遅くなったはずである。

もともと『放浪記』は、芙美子がある出版社（これについては、改造社、中央公論、もしくは読売新聞などが挙げられる）に預けた原稿であった。そして、この原稿を三上於菟吉が『女人芸術』に推薦したので連載ができたのである(2)。

このような過程を経て、『女人芸術』一九二八年一〇月号から「秋が来たんだ―放浪記―」をはじめに総二一編が連載される。続いて、この連載を改造社の編集部所属であった水島治男が読んで、『改造』（一九二九年一〇月号）に「九州炭坑街放浪記」が掲載されることになる。

ところで、どういう経緯で改造社所属の水島が『女人芸術』に連載していた「放浪記」を読んだのだろうか。

この疑問に対する答えは、藤野智士が「林芙美子と改造社」(3)で指摘したように、水島本人が残した回顧録にある。水島は『改造社の時代　戦前編』で『放浪記』との出会いを次のように回想する。

当時交際中であった妻に、昭和の青鞜派ともいうべき、新鮮な婦人雑誌が生まれたとして送っていたところ、連載中の「放浪記」を是非よんでみてくれとバックナンバーを送りかえしてきた。林芙美子の最初の小説であった。林芙美子は『文芸戦線』へときどき埋めくさの形で詩を載せていることでもあり「蒼馬をみたり」という詩集も出ていることは知っていたから、はじめてお目にかかる名前ではない。そこで私はあらためて連載のはじめから読みはじめてみたのである。こいつはいけるぞと思ったので、いつか編集会議に持ちだそうと考えたがなかなかふんぎりがつかない(4)。

林芙美子という名前は知っていたが、まじめに彼女の作品を読んだことがなかった水島においても、この「放浪記」は新鮮な衝撃で、成功を確信させる作品であった。

ともかく、水島の主導によって「九州炭坑街放浪記」が『改造』に載せられて以後、一九三〇年七月には、改造社「新鋭文学叢書」シリーズの一冊として『放浪記』が発刊された。

芙美子は、この『放浪記』の発刊について、次のように述べている。

放浪記を受讀して下さいます方へ！　私の放浪記が一冊にまとまつて、改造社から近刊されます。一人でも澤山の方が讀んで下さいましたら、うれしうございます。これは筆者からのお願ひ(5)。

自分の作品が一冊の本として、さらに有名な出版社から出版されることを嫌がる作家はいない。芙美子がどれぐらい嬉しかったか、よく感じられる箇所である。

この改造社版が初版と言われるものである。初版は、『改造』に掲載された「九州炭坑街放浪記」を「放浪記以前」と命名、プロローグとして挿入、それに『女人芸術』連載分の中から一四章を選択、収録した。

『放浪記』は、発刊後幅広く人気を取った。何よりも、芙美子本人の経験を土台で築かれた作品として、この点に共感する人達が多かったはずである(6)。

この人気にあやかって、同年一一月には、続編である『続放浪記』が発刊される。当時「新鋭文学叢書」シリーズのなかで、二冊目の作品を発刊した作家は、芙美子が唯一であった。つまり、彼女はこのような特別待遇を受けるほどの人気作家になったのである。また、『放浪記』の大成功によって、芙美子の貧乏な生活も終止符を打つことになった。

## 二　『林芙美子選集　第五巻』と『放浪記―決定版―』

一九三七年六月、多数の人気作を発表していた芙美子は、『林芙美子選集　第五巻』（以後、「選集」と表記）を通じて再び『放浪記』

を公開した。一九三三年に文庫版の『放浪記・続放浪記』を発刊したときから四年の歳月が流れた時点であった。何故、また『放浪記』なのか。彼女は「選集」のあとがきで次のように述べている。

この放浪記は昭和五年の七月に出版されて、のちに文庫になりましたけれど、私はこの放浪記をみるのが辛くて、しばらく絶版にしておきました。いま再び選集のはじめにこれを出しますのは、この放浪記を書いてゐた頃から丁度十年もたちましたし、これはこれだけで作者からつゝぱなしてもいゝではないかと云つた気持ちで、再び世に出してやる気持ちなのです(7)。

一九三七年に一二編の作品を発表していた芙美子において『放浪記』は、恥ずかしい初期作であった。専業作家になっていた彼女の視線から見る『放浪記』は、自分の未熟さを赤裸々に表すものにすぎないので、自分の手で絶版するのがいいと思ったはずである。

けれども、『放浪記』に対する愛着を隠すことはできなかった。そして初版そのままではなく、いくつかの訂正・加筆を行う形で「選集」に収録したのである。

芙美子本人は、「この放浪記には、あまり手を入れませんでした」と述べているが、廣畑研二が指摘したように、実は大きい訂正が行われている（芙美子は、このような改稿を「大きくない」と思ったかもしれないが）(8)。

最後の部分には「追ひ書き」を挿入している。それに、文体にも大きい変化があった。『放浪記』の成立過程に関する先行研究で指摘される文体の改稿は、この「選集」から始まっているのである。

一方、一九三九年一一月二一日には『放浪記―決定版―』（以後、「決定版」と表記）が発刊された。この「決定版」は新潮社から出ている。

「放浪記」は、幼い文字で、若い私の生活を物語ってゐる作品だけれども、私はこれを私の作品の代表的なものにされるのは、いまは不服な気持ちである。（…）

「放浪記」は、いままでにずゐぶん版を重ねて、若いひとたちに多く読まれてきた。今度決定版として出版するにあたり、不備だつた処を思ひきり私は書きなほしてみた(9)。

要するに、「決定版」の発刊によって、作品における不備な点を補完することができたのである。人気作家になった芙美子にとって、粗末な出世作の存在は認められなかったはずである。さらに、その作品が自分の代表作である以上、必ずそれを改稿してみたいと思ったのに違いない。

ところで、この「決定版」が改造社ではなく、新潮社で発刊された経緯に関する分析はまったく行われていない。そして、論者は改造社との関係という側面と関連づけて仮定してみた。

まず、一九三九年に新潮社版『放浪記』が出たとはいえ、その後、再び改造社から『放浪記』を発刊させたこともあるので、芙美子と

改造社が対立関係にあったとは思われない。これは、雑誌『改造』に対する芙美子の寄稿数や寄稿期間から確認できる。

芙美子は、一九二九年一〇月号の「九州炭坑街放浪記」をはじめ、一九五〇年一二月号の「熱海閑談」に至るまで、二一年間で四五遍の文章を寄稿した（一九四二年、一九四四年、一九四五年、一九四八年、一九四九年には寄稿なし）。

一九四二年と一九四四年、そして一九四五年に寄稿がないのは、当時『改造』が共産主義的な思想の文章を掲載した嫌疑で、一九四四年に廃刊、一九四六年に復刊されたことと関係がある。一九四八年と一九四九年は、芙美子が数多くの作品を発表した時期で、単行本の執筆や多様な雑誌への寄稿が続き、『改造』にまで寄稿する余裕はなかったとみられる。

一方、雑誌『新潮』には、一九三〇年一〇月号の「彼女の履歴」から一九四一年一二月号の「万葉集の好きな歌（ハガキ回答）」まで、一一年間で二七遍の文章を載せた。単純に割合の側面から見ると、『改造』と『新潮』に寄稿した文章の量は似たり寄ったりである。ところで、『新潮』には太平洋戦争勃発以後、二度と寄稿しなかった反面、『改造』には、亡くなる約五ヶ月前まで寄稿が続いた。このようなことから見ると、改造社との関係が悪かったとは見られない。

しかし、一九三九年になると、出版界を対象にした検閲が厳しくなり、それによって芙美子と改造社の関係にも微妙な亀裂が生まれはじめる。そして、このような状況が、新潮社からの「決定版」発刊を導くことになる。

新潮社の「決定版」も改造社版の「選集」のように、伏せ字および文章の空白処理などが見られる。ところで、「選集」には問題なく記述された部分が、「決定版」には新たに伏せ字になったところもある。その例として、『放浪記』に登場する平林たい子の夫山本虎三の名前が、「決定版」には新たに伏せられている部分などがある。

一九三九年ごろの『改造』は、思想的な色彩を帯びていた。これは、改造社の全体的な編集方針にも影響を与え、当時改造社で発刊された書物を見てもよく確認できる。例えば「選集」発刊から四ヶ月前である一九三七年二月、石坂洋次郎の『若い人』前編が、同年一二月には後編が発禁処分を受けており、右翼団体からも不敬罪、誣告罪で告訴された。すなわち、当時の改造社は、時代的な状況とは対照的な立場の出版社であった。そして、こうした出版社の書籍に、厳しい検閲が行われたのは当然であった。

芙美子において、改造社の左翼的傾向、またそれに従う検閲の問題は、かなり気に入らないことであった。そして『放浪記』を含めて、改造社からの単行本出版を減らしはじめ、ほかの出版社から発刊される単行本の数を増やしたと見られる。

つまり、長期間に渡って行われた『改造』への寄稿は、芙美子と改造社の円満な関係を意味することではなかったのである。むしろ、その寄稿は、改造社との疎遠な関係を最小限度に維持するための安全装置であった。一九三九年以後、改造社から発刊された芙美子の単行本は全部で六冊にすぎない。また、そのほとんどは『放浪記』と『続放浪記』のように、以前発刊された作品の再刊本であった。

雑誌『改造』への寄稿活動と反比例する発刊数である(10)。

芙美子は、現実を考慮せず、空論化する社会主義思想に反感を持っていた。この反感については、『女人芸術』に関する芙美子の発言と『放浪記』の内容から確認できる。

一九三〇年ごろの『女人芸術』は、創刊当時の「新人女性作家の発掘」という趣旨が希釈され、永島暢子らは、当時の支配階級を批判する批評を掲載するなど、左傾思想の雑誌になっていた。このような編集方向の転換は雑誌の発禁処分まで招来した。

芙美子は『女人芸術』が左傾化していることに対して穏やかではなかった。尾形明子は、こうした芙美子の心境を『放浪記』の中で探している。

> いつたい革命とは、どこを吹いてゐる風なんだ……中々うまい言葉を沢山知つてゐる。日本のインテリゲンチャ、日本の社会主義者は、お伽噺を空想してゐるのか(11)！

これは『女人芸術』一九二九年一二月号に載せられた「目標を消す」の一部として、当時日本の社会主義者に対する芙美子の批判意識が見られる場面である(12)。

『放浪記』は『女人芸術』に連載する前から完成していた作品である。つまり、革命的な知識人と社会主義者に対する反感は、以前からの生活実感によって内在していた感情であった。そして、人気作『放浪記』を書いた作家の立場を批判する人たちが登場するのも必然であった。

芙美子は一九三七年の「選集」を通じて、この『放浪記』に対する世間の批判について言及している。

> 偉い方達の云ふ「思想」も大切ではあるけれど、生活あってこその思想で、思想とは高邁なものばかりしか口にしない人達のものでもないと思ひます。この放浪記には思想がないと、その当時批評を受けましたけれど、これだって一人の「人間の書」ではあるのだと、私はそっと誇りたい気持ちもあるのです(13)。

このように、芙美子は、左翼思想の現実から遊離した抽象性を批判し、むしろ日常の生活自体こそ「思想」ではないかと主張する。一九三九年の「決定版」では、こうした批判に対して同様に反論している。芙美子は「決定版」のはしがきで「『放浪記』には思想がない」と批判する意見を紹介し、その「思想」という概念自体に対する疑問、それに対する反感を明らかにしている。

> 発表した当時は、左翼運動のさかんな頃で、「放浪記」には、思想がないと云って随分ひどい批評をうけたものであった。その批評にも私は黙って応へなかったが、いはゆる「思想」も大切ではあるけれど、生活あってこその思想で、その人たちの云ふ高邁な思想と云ふのは、いったい何を指して云ふのであらうか(14)。

改造社から「選集」を発刊した後、彼女は一九三八年一二月に『戦線』、一九三九年一月に『北岸部隊』という戦争ルポルタージュを発表する。

このように、時代の流れに便乗しながら「最前線で活躍する女性作家」という強靱なイメージを構築していた彼女において、『放浪記』に対する批判は、容認できなかったことに違いない。そこで再び、反論する必要があると思ったはずである。

こうして、芙美子は新潮社版「決定版」で反論することによって、強靱な女性作家としてのイメージを維持する一方、『放浪記』を批判した人たちへの強い反感も表出することができた。

さらに、この「決定版」の売り上げも相当なものであった。『新潮社八十年図書総目録』によると、「決定版」は一九三九年一一月から一九四一年六月までの約一年五ヶ月で、売り上げは十万四千部に達した。一九四一年二月には、改造社から『新日本文學全集　第十一巻・林芙美子集』が出たのに、一定期間「決定版」が売られたのである。

## 三　初版と「決定版」の比較

では、初版と「決定版」の相違点について具体的な例を挙げてみる。次の引用は、「粗忽者の涙」というエピソードの一部である。

（初版）

六月×日

ほがらかな空なので、丘の上の絹のやうな緑を戀ひして、久し振りに、貧しい女と男は散歩に出る話をした。

鍵を締めて、一足おそく出ると、どつちへ行つたものか、男の蔭は見えない。

焦々して陽照りのはげしい丘の路を行つたり來たりしたが、随分おかしな話である。

あざみの莖のやうに怒りたつた男は、私の背をはげしく突くと閉ざした家へはしつてしまつた。

「オイ！　鍵を投げろッ！」

又か……私は泥棒猫のやうに、臺所からはいると、男はいきなり、たわしや茶碗を私の胸に投げつける(15)。

（決定版）

（六月×日）

美しい透きとほつた空なので、丘の上の緑を見たいと云つて、久し振りに貧しい私達は散歩に出る話をした。鍵を締めて、一足おそく出て行つてみると、どつちへ行つたものか、夫の蔭はその邉に見えなかつた。焦々して陽照りのはげしい丘の路を行つたり來たりしてみたけれど随分をかしな話である。待ちぼけを食つたと怒つてしまつた夫は、私の背をはげしく突き飛ばすと閉ざした家へはいつてしまつた。又おこつてゐる。私は泥棒猫のやうに臺

所から部屋へはいると、夫はいきなり束子や茶碗を私の胸に投げつけて來た(16)。

この引用では確認できないが、初版にはそれぞれのエピソードにタイトル名が付けており、文末にはエピソードの作成年度が書かれている一方、「決定版」にはそれが全部削除されている。

また初版には、ほぼ全ての漢字にルビが付されている。頻繁な改行が見られるのも初版の特徴であり、口語体もよく使われている。

一方、「決定版」にはルビがあまり付けられていない。漢字の表記も一部変えられており、誤字の訂正も行われている。

初版のような頻繁な改行も「決定版」には見られない。改行の減少によって、日記文より、小説に近く形になっている。

さらに、特定人物に対する人称代名詞にも注目すべきである。初版には、無礼な同棲男に飽き飽きして、このエピソード限定で「夫」ではなく、「男」という人称代名詞を使っている。しかし、「決定版」では、全部「夫」と書き換え、主人公が「叫ぶ」部分も削除し、感情を表現する文章を整え、忍耐する女性の姿を強調している。

つまり「決定版」では、人称の統一を通じて女性の直接的な感情表現という初版の特徴を、ある程度自制している。

ほかにも、「決定版」は初版で伏せ字になっている部分を一部復元している点も注目すべきである。

（初版）

自動車は雨に打たれたまゝ夜の櫟林に轉がつてしまつた。
私は××××××を感じた。機械油くさい菜つぱ服に×××
ると、私はおかしくもない笑ひがこみ上げて來た。
十七八の娘ではなし、私は逃げる道を上手に心得てゐる(17)。

（決定版）

自動車は雨に打たれたまゝ夜の櫟林にとまつてしまつた。
私は何かせつぱつまつたものを感じた。機械油くさい松さんの菜つぱ服をみてゐると、私はをかしくもない笑ひがこみ上げて來て仕方がない。十七八の娘ではないもの。私は逃げる道なんか上手に心得てゐる(18)。

このように、初版では伏せ字になっている部分が「決定版」においては、復元されている。こうした改訂は、完全な『放浪記』を残したかった芙美子の努力だと見られる。ところで、『放浪記』の伏せ字はほぼ復元されている一方、『続放浪記』の伏せ字は、あまり復元されず、その前後の語句や文章も含めて削除されている場合が多い。この『続放浪記』も『放浪記』と同じく『女人芸術』連載当時のエピソードを収録しているが、「決定版」においては、なぜこのような構成を取っていたのか不明である。こうした『続放浪記』の伏せ字問題は、「決定版」における一つの重要な批判要素になる。

## 四　改定版（「決定版」）の伏せ字問題

ところで最近の『放浪記』研究で作品の成立過程を論じるとき、改訂版に対して激しく批判する意見が出ている。

森英一は『放浪記』の改訂を「ほぼ十年後に作者自身がそういう短所や欠点を可能な限り排除しようと作品に手を加えた。その結果、確かに読みやすくはなった。しかし、〈生と性〉に立ちむかう主人公の像はかなり不鮮明になってしまった。」と批判する(19)。

尾形明子も改訂を批判している。尾形は「乱暴な言葉が改められ、あるいは削除され、形容詞、擬音が省かれる。描写が具体的となり説明が多くなる等々により、それまでの断定的な独自体のリズムが崩れ、歯切れよい生々としたテンポが、「放浪記」の特色といわれるセンチメンタルなものに変わる。耳ざわりのよい歌となる。この大幅な加筆、改訂が「放浪記」にとって幸福であったとはとうてい思わない。筆なれた芙美子に手により幼い文字が整えられた時、それはそのまま「放浪記」を強烈に貫いていた詩精神とリズムの喪失を意味する。（中略）彼女自身のために書き綴った同じものを、読者を想定して改めた時、「放浪記」は字句や文脈の改訂を越えて、本質から変えられてしまったといえる。」と述べている(20)。

さらに、森まゆみは『放浪記』の改稿部分を紹介しながら「当初の、二十そこそこの、どん底の女の野性的な詩情や開き直りはなくなってしまった。」「あれほど人の目を気にせず、ヤブレカブレに生きていたフミコさんは、作品の評価を気にする人気作家になって、「立派な」「澄んだ」仕事を企てるようになっていた。」と批判している(21)。

このような『放浪記』の改訂に対する批判は、共通して『放浪記』という作品は「荒っぽい」作品でなければならないと規定しているのが特徴である。

しかし、なぜ『放浪記』が荒々しい文章で書かなければならないのか。こうした意見は、『放浪記』を洗練された文章に書き直すために行った改訂の結果を一方的に非難している。

尾形と森まゆみの批判は、初版の過激な部分がなくなったことに焦点を合わせている。つまり『放浪記』の文学的な意義は、駆け出しの文学である時に存在すると判断している。

このような意見は「男勝りの勝ち気な林芙美子」という作家イメージに便乗した評価として見る方が正しい(22)。言い換えれば、一九三九年以後、確立されていた作家のイメージに捕らわれた見方にすぎないのである。単純に、改稿によって初版の特徴が見られなくなっただけで、批判の対象になるのは認められない。

論者は、『放浪記』の改訂において批判すべき部分は、別のところにあると考える。その一例としては「決定版」の特徴として指摘した「伏せ字」に関する問題を挙げたい。「決定版」には初版の伏せ字が一部復元されていると、すでに指摘した。しかし、この伏せ字が復元されない場合には、新たな問題が生じている。例えば、「決定版」が描いている『続放浪記』のエピソードで、伏せ字がある文章を無分別に削除している場合がある。

①（初版）

何でもない風をよそをつて、玄関へでる。

「荷物を持つて、もう歸へるの……。」

××の寫眞を、まるで散しのやうに枕元に散亂させてゐた女が、フツと起きあがつて、それに座蒲團をかぶせると、

「ちよいと、先生がかへるまで歸へつちや駄目だわ……（後略）。」[23]

（決定版）

何でもない風をよそほひ、玄関へ出る。

「どうしたの、荷物を持つたりして、もう歸るの……」

「ちよいと、先生がかへるまでは歸つちや駄目だわ……私達が叱られるもの、それにどんなもん持つて行かれるか判らないし。」[24]

②（初版）

私はわけもなく涙があふれた。事務員をしたりして、つくした私の男が、大學を出ると、造船所の社員になつて、すました生活をしてゐる。どうしても會つて歸へらなければならない。

「こゝから見てると、あんな門位、船につかふ××××××を投げやすぐ崩れちやふのに。」

「職工は正直でかんすけん、皆體で打ゝかつて行きやんさアね。」[25]

（決定版）

私はわけもなく涙があふれてゐた。事務員をしたりしてあんなにつくした私の男が、大學を出ると、造船所の社員になつて、すました生活をしてゐる、こゝから見てゐると、あんな門位はすぐ崩れてしまふやうにもろく見えてゐるのに…。

「職工は正直でがんすけん、皆體で打つつかつて行きやんさアね。」[26]

初版『放浪記』で伏せ字になった部分は、一一箇所（初版では××××と表記されたが、「決定版」では（六月×日）と改稿された部分を含む）があり、『続放浪記』には二六～二九箇所（「〇」も伏せ字として含む場合、二九箇所になる）がある。ところで、引用のように「決定版」の『続放浪記』には、伏せ字が含まれている文章が全部、もしくは一部が削除されている場合が多い。

「決定版」に収録された『放浪記』の場合、伏せ字の部分が削除されているのは一箇所しかない。しかし、『続放浪記』の場合、伏せ字が含まれている一五箇所（「〇」を含むと一七箇所）の文章が削除されている。また、削除しないときは、空白処理にする場合もある。

つまり、『続放浪記』が『放浪記』より二倍以上の伏せ字があるにもかかわらず、「決定版」では十分な復元が行われていないのである。こうした事実に言及せず、今までの『放浪記』において不備な点を補完したものが「決定版」だという芙美子の言動には、再考の余地がある。

ただし、これは検閲の問題とも関連づけて見なければならない。伏せ字は、内務省の検閲によって、もしくは出版社や作家の自主的な検閲（内閲）によって発生する。ここで、出版社や作家による内閲は、内容的に検閲される可能性がある部分を伏せ字にした後、検閲官に提出することである。つまり、検閲される側の過剰な反応、当時の検閲システムの過剰な内面化が行われていたことを意味する。

また、伏せ字を削除することによって、作品に行われた検閲行為自体が隠蔽されることになる。言い換えれば、伏せ字の削除によって文学作品に加えられた権力（伏せ字）の痕跡が不可視化されるのである。

こうした内閲について、芙美子本人も積極的に荷担していると見られる。そうすると、戦争行為に協力し「時流に乗った作家イメージ」とも一致する。これほど「決定版」には、検閲の痕跡が巧妙に隠されている。これについては、弁解の余地がない[27]。

## 五　『新日本文學全集　第十一巻・林芙美子集』

一九四一年には、再び改造社から『放浪記』が発刊される。芙美子は、この『新日本文學全集　第十一巻・林芙美子集』（改造社、一九四一年。以後、「林芙美子集」と表記）の「作品について」を通じて、『放浪記』という作品に対する解釈や、「林芙美子集」を発刊した経緯について述べている。ちなみに、現在林芙美子の全集として一般的に参考される文泉堂出版の『林芙美子全集』には収録されておらず、ここで『放浪記』に関して言及している部分をすべて引用しておく。

「放浪記」は、云はゞ私の作品としては処女作のやうなものですけれど、いま読んでみると、自分のものとしては非常に苦しいもので、何時の場合でも、放浪記は私にとって暗い影のやうなものに思へます。現在はこの放浪記の時代から十年以上も歳月が過ぎてしまって、いま考へてみますと、私の青春の嘔吐を見るやうな淋しいものを感じないではゐられません。だけど、これはこれで、どうしてもと云はれる書店の求めであれば、眼をつぶって出すように仕方がない。少しばかり加筆してこゝに出すことにしました[28]。

「林芙美子集」は、四年ぶりの改造社版であったが、その二年前、新潮社から『放浪記』を発刊した経緯については全然説明していない。その代わり、「どうしてもと云はれる書店の求めであれば、眼をつぶって出すように仕方がない」という箇所から「林芙美子集」発刊の理由が予測できる。

すなわち、当時厳しい経営状況に置かれた改造社が、『放浪記』の再発刊を依頼し、芙美子がそれに応じたのである。確かに、『放浪記』を、それも改造社から再刊することは、彼女としてはあまり気が向かない話であったかもしれない。しかし、改造社でなければ人気作

家になるかどうかも不確実であったし、ほかにも多方面にわたって助けられたこと（欧州滞留期間に帰国旅費を支援されたことなど）もあるので、芙美子において、一種の恩返しのような決定だったのである。

「林芙美子集」に収録された『放浪記』は、以前の「選集」を底本にしている。ただし、本文に挿入された石川啄木の歌一首を削除している点など、当時の時代状況を考慮した訂正が行われている(29)。

## 六　『放浪記　前篇』と『続放浪記』

一九四六年年一〇月と一二月には、再び改造社から『放浪記』と『続放浪記』が発刊された（以後、「復刻版」と表記）。これは、初版の復刻版である。

この「復刻版」のあとがきには、戦争期を経験した感懐およびこれからの生活に対する覚悟が書かれている。

この「放浪記」は昭和五年に改造社から出版しました。今読みかへしてみますと、遙かな遙かな思ひ出で、そのころの風俗や生活なんかがなつかしく思ひ出されてきます。その当時から、訳十六七年たってゐて、その間に十年もの戦争がつゞいてゐました。全く、こんどの戦争は、私たちを根こそぎいためっけてしまひました。この「放浪記」を読みかへしますと、私は戦争のつゞいてゐた長い年月が、まるで空白だったやうな気がします。人間と云ふのがいかにも哀れに考へられてなりません。（…）もう、再び世に出る事もあるまいと思ってゐたものだけに、この「放浪記」が出版されると云ふことは、作者の私としては感慨無量なものがあるのです。（…）文化は人間があたゝかくつくったものです。文化が戦争に敗けてよい筈はありません。切角、日本も戦争に敗けたのですから、この尊い敗戦を生かして、私たちはいゝ生きかたをしたいものです(30)。

芙美子は「選集」や「決定版」を発刊した視点で、この『放浪記』を読むと自分が恥ずかしくなると述べた。しかし、多様な経験を積んだ戦後の彼女において、『放浪記』は青春時代の記録のような作品であり、もう恥ずかしい作品ではなかった。そして、初版の復刻版を出すことを決めたのである。

## おわりに

以上、『放浪記』の成立過程について、改造社版と新潮社版で発刊された版本を中心にまとめてみた。この二社以外にも多様な出版社を通じて『放浪記』は発刊されている。しかし、はじめに言及したように『放浪記』の作品構成に大きい影響を与えたのは改造社版と新潮社版に限られる。ほかの出版社で出たのは、この二社のものを（ほぼ新潮社版）参考にして編集されており、独創性を持っていると

も考えにくい。そして、本論では特別に言及することを避けることにした。

現在も『放浪記』はいろいろな出版社から発刊されている。その底本は新潮社版のものであるが、本格的に『放浪記』研究がはじまる一九九〇年代に入ってからは、改造社版を底本にするものが多数出版された。尾形明子編『作家の自伝17　林芙美子』（日本図書センター、一九九四年）と森まゆみの解説が付いた『林芙美子　放浪記』（みすず書房、二〇〇四年）などを通じて初版『放浪記』が紹介された。また、これより先の一九九八年には、ゆまに書房から『放浪記』・『続放浪記』の初出復刻版も発刊された。ただし、この二冊はかなり入手できない状態である（『放浪記』（第一部）の場合は、一九七二年にほるぷ出版から出た復刻版もあり、この方は問題なく入手できる）。

『放浪記』は多様な版本が存在する作品である。まるで成立過程から一種の〈放浪〉を経験しているようにみられる。このような成立過程こそ『放浪記』の重要な部分であり、またそれを考察することから『放浪記』研究がはじまるだろう。

（かん　じょんほ・言語文学専攻）

**注**

(1)『放浪記』（「第一部」）と『続放浪記』（「第二部」）、さらに『放浪記　第三部』（「第三部」、一九四九年）を合わせて「放浪記三部作」と称される場合がある。しかし、数年にかけて訂正・加筆が行われた『放浪記』と『続放浪記』に比べて、『放浪記　第三部』は文体の変更点があまり見られない。また、雑誌の連載分と単行本の相違点も少ない。そのような観点から、本論文では『放浪記　第三部』については論じない。

(2) 芙美子は『林芙美子文庫・放浪記Ⅱ』で「此放浪記は安安と出版されたものではないだけに、私にとっては思ひ出深いものである。改造では二年間ストックにされてゐたし、中央公論でも、一年半ほどストックになってゐたのだから、長い道順を経て発表された。」と述べている。以後、原稿は読売新聞社の平林譲次まで送られた。しかし、長い間、それを検討したという気配がなかったので、芙美子はこれを回収した。そして、三上於菟吉と偶然に出会った時、原稿の掲載を要請し、三上の了承を得て『女人芸術』への連載が可能になった。尾形明子『華やかな孤独』（藤原書店、二〇一二年）、73～74頁。

(3) 藤野智士「林芙美子と改造社」（『江古田文学』第81号、江古田文学会、二〇一二年一二月）、74～75頁。

(4) 水島治男『改造社の時代　戦前編』（図書出版社、一九七六年）、48頁。

(5) 林芙美子「淫賣婦と飯屋」（『女人芸術』女人芸術社、一九三〇年六月）、29頁。

(6) 芙美子は『林芙美子文庫・放浪記Ⅰ』で、「この本が案外多くの読者を得た事は私としても以外であった。貧しい生活をともにする人達の共感を得た事は感激だった。」と述べている。そして、「以前はとても放浪記を読む気がしなかった」が、無一物になって以来、ようやくこの放浪記を理解することができたと告白したある婦人の事情を紹介している。

(7) 林芙美子『林芙美子選集　第五巻』（改造社、一九三七年）、395頁。ちなみに、いくつかの版本では、『放浪記』の発刊年度を昭和四（一九二九）年と書いているが、これは芙美子の勘違いである。昭和五（一九三〇）年が正しい。

(8) 例えば、廣畑は「選集」の大きな変更点を「各章タイトルと年次をすべて抹消したこと。正続の区分も取り払ったため、全29章の歌日記物語短編集が、年次不明の歌日記になってしまった。」などのように評価している。廣畑研二『林芙美子　放浪記　復元版』（論創社、二〇一二年）

(9) 林芙美子『放浪記―決定版―』（新潮社、一九三九年）、3～9頁。

(10) 『林芙美子選集』の発刊が終了した一九三七年一二月まで、改造社で発刊された芙美子の単行本は一九冊に至っていた。また、雑誌『改造』には、総二九編の文章を投稿し、その中で単行本などの形で発刊されたのは二六編に至る。ところが、一九三八年三月から一九五一年一月まで、『改造』への投稿は一六回であるが、その中で単行本などの形で発刊されたのは二編しかない。

(11) 林芙美子「目標を消す」（『女人芸術』女人芸術社、一九二九年一二月）、101頁。

(12) さらに、尾形は「目標を目指す」の文末に「なんだかあまり長くなりましたので、これで一寸ひとやすみしませう。気分が新しくなりましたら、又続けます」と書かれた理由を『女人芸術』の左傾化に違和感を抱いたからと仮定する。尾形明子『『女人芸術』の世界――長谷川時雨とその周辺』（ドメス出版、一九八〇年）

(13) 林芙美子「林芙美子選集　第五巻」あとがき（『林芙美子選集　第五巻』改造社、一九三七年）、398頁。

(14) 同『放浪記―決定版―』（新潮社、一九三九年）、4～5頁。

(15) 同『放浪記』（改造社、一九三〇年）、109～110頁。

(16) 同『放浪記―決定版―』（新潮社、一九三九年）、86頁。

(17) 同『放浪記』（改造社、一九三〇年）、133頁。

(18) 同『放浪記―決定版―』（新潮社、一九三九年）、103～104頁。

(19) 森英一「『放浪記』論――その基礎的研究」（『金沢大学教育学部紀要』第33号、金沢教育学部、一九八四年二月）、28頁。

(20) 尾形明子『作家の自伝17　林芙美子』（日本図書センター、一九九四年）、301～302頁。

(21) 森まゆみ『林芙美子　放浪記』（みすず書房、二〇〇四年）、265～269頁。

(22) このようなイメージは、『放浪記』に描かれた主人公の姿から作られた。女性一人で生きていく生活の厳しさ、またそれに屈することなく、作家になるために努力する姿が、作家林芙美子の大衆的イメージになった。さらに、従軍時代、誰よりも一番早く漢口に到着し、それが大々的に報道されたことが「男勝りの林芙美子」というイメージを堅固にした決定的な事件だったと見られる。

(23) 林芙美子『続放浪記』（改造社、一九三〇年）、64～65頁。

(24) 同『放浪記―決定版―』（新潮社、一九三九年）、250頁。

(25) 同『続放浪記』（改造社、一九三〇年）、107頁。

(26) 同『放浪記―決定版―』（新潮社、一九三九年）、281頁。

(27) このような意味で、廣畑研二の『放浪記』復元作業（注8の参考文献）は注目すべきことだと思われる。廣畑は、一五種の書誌などを参考して『放浪記』三部作を復元している。ただし、これに関する本格的に検証は行われていない。

(28) 林芙美子『新日本文學全集　第十一巻』（改造社、一九四一年）、463頁。

(29) 『放浪記』には、石川啄木の「平手もて　吹雪にぬれし顔を抜く　友共産を主義とせりけり」（啄木歌集『一握の砂』に収録）という一首が載せられている。しかし、「林芙美子集」では、まるごと削除されている。

(30) ただし、本当に『放浪記』が発禁されたとは確言できない。『昭和書籍／新聞／雑誌発禁年表』によると、一九三〇年七月から一九四四年一一月まで、芙美子が発表した作品中、発禁処分になったのは、短編集『初旅』（一九四一年）の一編しかない（処分の理由は全般的な不健全さ）。また、この短編集には『放浪記』が含まれていない。そして『放浪記』は、芙美子が直接絶版したと見る方が正しい。小田切秀雄、福岡井吉編『増補版昭和書籍／新聞／雑誌発禁年表　下』（明治文献資料刊行会、

一九八一年）、782頁。